

## 第10話 松竹 青春路線の復活

### ●森田健作が天地真理とのコンビで青春路線に復帰

それまでのホームドラマ路線から逸脱してみせた山根成之の「同棲」映画は、そのブームが去るとともにひとときの徒花的な役目を終えたが、すっかり喜劇路線一辺倒になっていた松竹映画に青春路線を復活させる呼び水になったのは事実である。再び登場した松竹青春映画は、テレビや歌の世界のアイドル人気を重視した作品が主軸だったとはいえ、番組の中で大きな位置を占めるようになる。

70年12月公開の『高校さすらい派』以来2年以上作られなかった松竹の青春映画は、73年4月公開の『同棲時代 今日子と次郎』で久々に映画館に現れたのである。ゴールデンウィーク用の番組となるその次の2本立てには、それまで東宝専属だったクレージーキャッツの植木等が松竹に転じた最初の作品『喜劇 ここから始まる物語』の併映作として本格青春映画『愛ってなんだろ』（73 広瀬襄 脚・田波靖男）が当てられた・

人気絶頂の歌手・天地真理をヒロインにして、テレビの青春ドラマでの人気を背負った森田健作が『高校さすらい派』以来の青春映画出演になる。脚本を担当したのは東宝『若大将』シリーズの田波靖男。監督は助監督時代に書いたシナリオ『陽の出の叫び』がシナリオ作家協会の賞を受け67年に日活で藤田敏八監督のデビュー作として映画化されたことで注目されており、これがデビュー作になる34歳の広瀬襄。松竹の伝統と外部の才能とが融合することで新しい息吹を持った一作が生まれた。

天地は、前年そのヒット曲を映画化した『虹をわたって』（72 前田陽一）で映画デビューを飾っていたが、これはソロ歌手として活動を始めていた沢田研二との共演ながらラブストーリーと言うよりは父の再婚をめぐるホームドラマである。大ヒットしたデビュー曲「水色の恋」の一節「白雪姫みたいな心しかない私」から「白雪姫」の愛称だった彼女と、「7人の小人」ならぬスラムの住人7人との交流が爽やかに描かれた。

『愛ってなんだろ』の麻里子（天地真理）は玩具デザイナー。ケーキ屋の一人娘で歌好きの明るい彼女は、職場でも町内でも人気者だ。それに対し同じ玩具メーカーで働く俊二（森田健作）は天涯孤独の身の上であり、音楽を異常なまでに嫌うなど暗い雰囲気のある青年である。表面的には正反対の二人だが、それでいて互いにどこか惹かれ合うものがある。俊二のアイデアを麻里子がデザインする形でペアを組み新商品の開発に苦心したことから、彼らの仲は急速に進展していった。

しかし俊二は、自分が背負っている過去の重みを克服しきれない。以前作曲家志望で勉強していた頃、自動車事故を起こして同乗の恋人を死なせてしまい、自らも手を怪我して

音楽を断念したのだった。その過去を忘れて麻里子とやっていくだけのふんぎりが、彼にはどうしてもつかない。悩んだ挙げ句過去の全てを告白して、行く先を教えず彼女の前から去る。せっかく完成した二人の新製品も、麻里子に横恋慕している専務のわがまま息子のやっかみからの横車で一旦は製作中止になってしまう。

それでも悪いことばかりは続かない。新製品はなんとか発売されることになり、店頭に出るや大好評を博してヒット商品となった。また、去っていく前に俊二が麻里子に贈った曲がテレビ局スタッフの目にとまる。番組の中で麻里子はその歌を唄い、画面を通してどこかにいるはずの俊二に訴えかける。

俊二は、とある山奥の保育園に住み込み園児たちの世話をして暮らしていた。偶然番組を見ていた園の同僚から局に連絡があり居場所がわかる。明るい陽射しの降り注ぐ山間の小さな園へ、麻里子は俊二を訪ねて行く。

だが俊二はもう、ここで生涯働いていく決心をしていた。東京に戻る気はないと言う。麻里子は彼の意思を尊重し、そのまま帰ることにする。彼女の方は、これから歌手の道を歩んでいくことになりそうだ。俊二も麻里子も、田舎と都会それぞれの場所で新しい人生に踏み出していくのだった。

二人は結ばれないものの、これは一種のハッピーエンドと言っていいだろう。自己に誠実にやっていこうとする若者たちが、苦しんだ末それぞれ最も満足のいく自分らしい生き方を獲得するわけである。自分らしい生き方。それは、シラケの時代などと言われる中で自らの価値観に基づいた生き方を模索するわれわれにとって何よりも見つけ出したかったものだった。

## ●森田健作最後の青春映画

森田健作は、続いて吉沢京子を相手に迎えてコンビを組む。東宝では処を得なかった吉沢だが、その後テレビドラマに戻って「さぼてんとマシュマロ」71などで活躍していた。おとなしいが芯は強そうな彼女のキャラクターは、東宝では少女の難病闘病もの『父ちゃんのポーが聞こえる』（71 石田勝心）でこそみごとに生かされたのみだが、松竹に転じて組んだ生真面目な森田健作とうまく噛み合った。

盲目の少女（吉沢京子）と孤児院出身の青年（森田健作）の純愛を扱った『ひとつぶの涙』（73 市村泰一）は絵にかいたようなハッピーエンドがわざとらしすぎるなど難が目につくものだったが、その延長線上に作られたコンビ第2作『涙のあとから微笑みが』（74 市村泰一 脚・田波靖男）は、常に真剣な青年と娘の周辺を丹念に描き取ってすぐれた青春映画となった。

徹（森田健作）は、両親のいない青年である。中学を卒業して以来、造船所の溶接工として働き、高校生の妹（桜田淳子）を養っていた。堅物の彼をからかって「カタパン」と

呼ぶ中学時代からの親友・忠男（小倉一郎）は同じ造船所に勤め、雄三（石立鉄男）は自動車陸送会社で運転手をしている。

この男三人組という人物関係構造は、戦前から「三羽鳥」と称して男優3人組を売り出してきた松竹映画の伝統と言ってもいい。戦前の上原謙、佐分利信、佐野周二、戦後の鶴田浩二、佐田啓二、高橋貞二などが有名で、3人が競演することも珍しくなかった。『ひとつぶの涙』では、水谷豊、高岡健二が森田との3人組を形成している。

桜田淳子は、73年中学3年のとき「天使も夢見る」でデビューし同年「わたしの青い鳥」をヒットさせて日本レコード大賞新人賞受賞し『ときめき』（73市村泰一）、『ひとつぶの涙』に歌手役で顔を出した後、この映画で初めて本格的に出演した。なお、「花の中3トリオ」と呼ばれた3人のうちで1年早く72年中学2年のとき「せんせい」でデビューした森昌子は、やはり73年に『男じゃないか 闘志満々』（73井上梅次）、で映画デビューし、早くも『としごろ』（73市村泰一）で主演している。『としごろ』は山口百恵のデビュー曲の映画化であり、山口も顔を出している。このトリオの活躍については、後に詳しく述べたい。

休日、三人組は雄三の運転でドライブに出かける。忠男と雄三は、どこかで可愛い女の子にめぐりあわないかと鶉の目鷹の目だ。ところが、浮ついた気分のせいで不注意から男の子を跳ねてしまった。事故の処罰で運転免許停止になったのでは雄三は職を失うことになる。徹はとっさに身代わりを買って出た。

幸い子どもの怪我は軽かったが、この子の姉・邦子（吉沢京子）は病院に駆けつけた徹の頬を思い切りひっぱたく。父親のいない家庭で造船所の下請け会社に勤め一家の生計を支える彼女には、かけがえのない弟に傷を負わせた相手が許せなかったのだ。

友達に罪を着せるわけにはいかないと、その後雄三は自ら警察に名乗り出、仕事を辞めて田舎へ帰っていく。徹が身代わりだったことを知って邦子は彼に謝り、それから二人の交際が始まる。邦子は徹の誠実なところに好感を持ち、徹は邦子のひたむきさに惹かれる。同じ頃、忠男にも和代（岡本茉莉）という恋人ができた。徹と邦子、忠男と和代、それぞれ貧しいながらも若い活気に満ちた思いが膨らむ。

そこへ不景気の波が押し寄せる。石油ショックの影響で造船所の経営が急激に悪化したのである。徹も忠男も自宅待機を命じられる。工員たちの間に人員整理の対象になるのではないかとの不安が広がった。徹は人事課の奈美（高沢順子）から独身者は特に危ないと教えてもらい、忠男に急いで和代と結婚するよう勧める。自分は解雇されてもまだなんとなかなるが、和代が妊娠しているだけに忠男がクビになったのでは困るだろうとの思いやりだった。

質素だが心のこもった結婚式で、束の間ながら皆は明るい気分になれる。しかし人員整理が発表になったとき、解雇されたのは徹でなく忠男だった。徹は人事課長と奈美との不倫関係を偶然知ってしまっており、その口から露見するのを恐れた課長が一方向的に配慮し

てみせたのだ。

忠男は徹が課長に取り入ったのだと誤解し、憎む。会社の下した決定だけに代わってやるわけにもいかない。かといって事情を話せば奈美を傷つける結果になる。徹は甘んじて非難に耐え、邦子にさえ言えずに独り悩む。

邦子の会社も、造船所からの仕事が途絶えたためにあっさり倒産した。失業した彼女は、家族のために思い余って徹に内緒でキャバレーのホステスになることを決意する。それを知り怒る徹。じゃあ、どうすればいいの、と反発する邦子。二人の間にも亀裂が生じ、仲違いしてしまう。

そこへ、痛ましい事件が起きる。生計を立てるためビル工事の日雇い人夫をしていた忠男が転落死したのだ。嘆き悲しむ和代の姿を目の当たりにして徹はやりきれない気持でいっぱいになる。さらに加えて、課長から玩ばれた未捨てられた奈美の自殺未遂騒ぎだ。徹は、遂に怒りを爆発させた。課長に詰め寄って殴り飛ばし、辞表を叩きつける。退職金は全額、お腹の子どものためにと和代に渡し、自分は僅かな貯えを元手に屋台の焼鳥屋を開業するのだった。

その徹の許へ邦子が訪ねてきた。自分に対する彼の思いやりを素直に受け止める気になったのである。寒風吹きすさぶ暗い横町の路地、邦子が客を呼び込み徹が串を焼く。提灯をともした屋台のあたりに温かい空気の漂うのが、画面から伝わってくるようだった。こうして二人の心が再び結びつき一緒にこの屋台をやっていくだろうことが示され、映画は終わる。

主人公・徹は真面目一点張りの青年である。その彼が、懸命に生きている娘・邦子と恋をして結ばれる。それだけならごく当たり前の成り行きであり、ただ通り一遍に描いたのでは甘ったるい平凡な話になってしまいかねない。事実、『ひとつぶの涙』にはその気味があった。

しかし、人物が典型的に過ぎた『ひとつぶの涙』とは違い、この作品ではさまざまな若者が登場して物語に立体感を与えてくれる。徹の生真面目さを時には揶揄する陽気な友人たちの存在は、主人公が大仰に美化されることを防ぐ。不倫に走る奈美のことだって単純に否定はされず、ひとつの青春の形として心理に奥行きを持たせて描いている。だから、徹がいくら真面目くさった科白を口にしようと、大げさなくらい真剣極まりない行動をとろうと、白々しくなってしまうようなわざとらしさは少しも感じられず、観る側も素直に受け止めることができるのだ。

『夕陽』シリーズから『涙の…』まで、どの作品においても森田健作演じる若者は生真面目だ。負い目を過度に感じたり、不幸な境遇にあってもくじけず地道にまっすぐ生きようとしたり、楽して上昇しようなどとは思ってもよらず損してでも正直にやっ払いこうとする。セックスに関しては、ことに潔癖である。『涙の…』の「カタパン」という仇名に表れているように時代遅れなまでにお堅い。キャバレーに勤めるというだけで恋人を激しく非

難する。それが森田健作というスターのキャラクターだった。

『涙の…』の後、森田は『砂の器』(74 野村芳太郎) など文芸大作路線に転じ、悲恋もの『はだしの青春』(75 市村泰一) を最後に青春映画から離れていく。そして周知の通り92年に参議院議員となり、98年には衆議院に転じた。この間、文部政務次官を2期にわたって務め、文部省(当時)の課長だったわたしは森田政務次官に仕える経験をしている。アイドル青春スターの頃のままの直情径行で政治家としては純情な仕事ぶりに、往時の出演作品を懐かしく思い出したものだ。現在は千葉県知事として2期目を迎えている。

### ●みずみずしい少女4人組

森田健作に代表される松竹青春映画は、73年以降次々とアイドル主演作を送り出す。森昌子と新人女優・秋谷陽子が主演し、歌手デビューしたばかりの山口百恵、石川さゆりが顔を見せた前述の『としごろ』に続き、『ときめき』(73 市村泰一 脚・石森史郎) が作られた。

ここでは1958年生まれの「中三トリオ」より1歳か2歳上の栗田ひろみ、秋谷陽子、海野まさみという新人女優たちにTVドラマ「時間ですよ」で一躍人気を集め「赤い風船」で歌手デビューした浅田美代子の4人が水泳部の女子高生を演じる。監督の市村泰一は1925年生まれの松竹生え抜きで、61年のデビュー以来娯楽映画の職人めいた位置にいた。それが、『としごろ』を転機に青春映画の佳作を連発する。『ときめき』でも少女たちの胸のときめきをみずみずしく掬い取っている。それに接した驚きを、21歳のわたしは次のように書いた。

【ウサギ跳びというのは、ぼくのようにスポーツに馴れていない人間には、相当にきびしい運動だ。若い女優さんにとっても、たいへんなことだろう。それを、秋谷陽子と海野まさみは、演技ではなく、ホントにやっている。市村泰一監督の歌謡青春映画『ときめき』、出演する若い女優さんたちは、このように、ホントに泳ぎ、ホントに走りまわる。スクリーンの中で躍動する彼女たちの肢体は、動くことによって若さの持つエネルギーを発散し、美しい。

なにより、青春映画の主人公たちに必要とされるのは、巧みな演技力などではなく、作品世界の中に体現する彼ら自身の若さの、みずみずしさであるに違いない。小器用な芝居はかえってエネルギーの発散を制約する。むしろ、所作の生硬さが、ういういしい魅力をかもしだすといえよう。

母親の再婚話にすねて家をとび出し、暴漢に襲われてかろうじてのがれた海野まさみを中学時代のプールで秋谷陽子と栗田ひろみが発見するシーン。三人は、ほとんど会話を交わさない。無言のうち、ひとりが着衣のままプールにとびこむ。それを見て、あとの二人

も次々とびこんで、ずぶぬれの姿でほほえみ合っ——それで親友同士、すべてを理解でき、わだかまりを溶けさせる。

このクライマックスシーンでも、三人はホントに水にとびこみ、彼女たち自身のしなやかな身のこなしで、劇を表現している。それこそ百万言にもまさる、とでもいうか。

そうして、この“所作よりも動作”ともいうべきあり方は、青春映画ならぬ現実の青春を生きるぼくたちの生活の中にも、生きてくるのではあるまいか。小ざかしい老成への警告として。

前作「としごろ」といい、ぼくたちの親にあたる年齢になる市村監督の、新鮮さを失わない、的確な若さの把握ぶりには感服させられる。】(キネマ旬報 73年9月上旬号)

ただ、こんなに輝いていた4人の中でこの後アイドル青春映画に主演作を持つのはそのヒット曲を映画化した『しあわせの一番星』(74 山根成之)、人気少女漫画の映画化『あした輝く』(74 山根成之)の浅田美代子だけだった。

#### ●眩しかった松竹青春映画の恋人たち

『愛ってなんだろう』でデビューした監督・広瀬襄の第2作『恋は放課後』(73 広瀬襄)は、大映から移籍した松坂慶子の松竹初主演作となった。そして広瀬の第3作『ムツゴロウの青春記』(74 広瀬襄 脚・広瀬襄+満友敬司+今関健一 原・畑正憲)は、松坂の青春映画における代表作と言っていい。原作者の畑正憲自身をモデルにした主人公ムツの恋人役である。ムツを演じたのは元GS ザ・スパイダースで、解散後はソロ歌手、俳優、司会と多方面で活躍していた井上順。

ムツゴロウまたはつづめてムツの愛称で呼ばれる正(井上順)は、東京の大学の動物学科で大好きな動物たちの世話をしつつ研究に励んでいる。九州の両親は彼を医者にするため医学部に通わせているつもりでいるのだが、その意に反し勝手に専攻を変えていた。

ムツには故郷に高校時代からの恋人・明子(松坂慶子)がいる。いつか彼女と結婚して二人で動物たちと住む島を作りそこで暮らすのが夢だった。貧乏下宿に巣くう仲間の学生たちとわいわい楽しくやりながら、夢の実現のためこつこつ勉強している。

ムツの父親は彼を医者になる娘と結婚させようとしているから、明子との仲を引き裂こうとする。それでも二人は怯まない。明子は、息子と別れてくれという父の頼みをきっぱり断り、ムツが医者になる気などないことまで告白してしまう。

激怒した父親から勘当されたムツは、仕送りを断たれても夢を捨てようとしな。思い切って東京に呼び寄せた明子と同棲して、一層研究に没頭する。下宿の仲間たちは次々と安定した一流企業に就職していくが、それをよそに、ムツと明子は生活の苦しさ、夢の実現の困難さをものともせず突っ走る。

金を貯めるため一旦は離ればなれに暮らす羽目になるものの、少しもくじけない。とうとう、北海道の小さな無人島の使用許可を得て「動物王国」作りに着手する日を迎える。二人は正式に結婚し、小舟に動物たちを載せて島へと漕ぎ出していく。

ムツと明子は、とにかく楽天的である。どんな障害に出会おうと深刻になったりしない。夢を決して捨てようとせずに気取らず気張らずやっていく。形としては同棲するのだが、「同棲」映画のカップルたちとは違い、夢を実現するまでの1ステップとして少しでも生活費を切り詰めるために結婚前から一緒に住むというだけの自然な営みなのである。

二人が顔を合わせる都度儀式のように必ず行うムツが明子の胸のふくらみの片方をギュッと握る行為も性的な匂いは全くなく、いかにも少年少女の頃からの付き合いの延長であるのを感じさせる。ここでは胸を触るのが性的愛撫ではなく心臓の鼓動に触れて生きている実感を確認するためのものとして位置付けられている。

そして、各種動物を満載したノアの方舟を思わせる小舟に一切合切の持ち物を積み自らの手で艀を漕いで奈美と乗り越えて進んで行くラストシーンは、まさに彼らのひたむきな前進の象徴だ。原作は1950年代の話を70年代に置き換えたために現在性があり、大学4年生で進路決定をしようとしていたわたしには身に迫って感じられた。医者になれと言う両親に逆らって行政学や政治学を学ぶ道に進んだ身にはなおさらだった。

ただし、わたしには同年齢の女優である松坂慶子が演じた明子さんのような存在は皆無だった。同年代の女性とは完全に無縁だった鹿児島男子校の高校時代と違い、東京での大学生活には接点がなかったわけではない。おそろおそろデートを申し込んだりしたこともある。だが、結果は連戦連敗。何度も振られる憂き目に遭っていた。そんなわたしにとって、松竹青春映画のハッピーエンドを迎える恋人たちは、ただ眩しい限りだった。

## ●最後の松竹青春コンビ——中村雅俊と檀ふみ

この時期の松竹で最後に登場した青春コンビは、中村雅俊と檀ふみである。

中村は慶應大学在学中に文学座研究生になり、74年に卒業と同時にTVドラマ「われら青春！」の主演に抜擢され、その挿入歌「ふれあい」で歌手デビューして大ヒット。小説家・檀一雄の長女である檀は、東京教育大学（現・筑波大学）附属高校在学中に叔父が東映京都撮影所長だった縁から『昭和残侠伝 破れ傘』（72 佐伯清）でデビューし、74年に慶應大学に入学したばかりでNHKの人気クイズ番組「連想ゲーム」のレギュラーとなりお茶の間の人気を集め、東宝の文芸映画『青春の蹉跎』（74 神代辰巳）に出演という、両者ともに順風満帆のコースを辿っていた。

二人は、『ふれあい』（74 市村泰一）を皮切りに『思い出のかたすみに』（75 宮崎晃）、『俺たちの時』（76 水川淳三）と、いずれも中村雅俊のヒット曲を主題歌にした三部作で共演している。とはいえ、同じ大学の4年先輩だけあって主体となるのは中村の方だった。ま

だ演技者としてのキャリアが浅い檀は、中村が演じる主人公の思いを受ける形で相手役を務めるといった感じにしかならなかった。

その中村雅俊のキャラクターは森田健作のそれとは異なり、単に真面目一辺倒ではない。むしろ最初はシラけた気分で日々を送っており確たる目的も持たずふらふらしており、それが檀ふみ演じる身近なところにいる娘の純粹さと出会うことで地に足がついた生き方を獲得していくのだった。

三部作のうち青春映画色が最も濃いの『思い出のかたすみに』である。『ふれあい』はヒロインの死で終わるメロドラマ的要素が強いし、『俺たちの時』は主人公と笠智衆の認知症になった老人との交流がもうひとつの大きな人間関係となり、檀の役割のウエイトが相対的に小さい上、彼女は他の男と婚約していることがわかり中村はみごとに失恋してしまう。コンビ作としての体裁は脆弱だ。

『思い出のかたすみに』（75 宮崎晃 脚・宮崎晃）は、これが2作目になる新鋭の監督作品である。隆夫（中村雅俊）と未知（檀ふみ）は同じ大学の学生であり、同時に二人は隆夫の姉と未知の兄が夫婦という関係でもある。人形劇サークルで活動している未知は隆夫のことが好きなのだが、先輩である隆夫からは子ども扱いされて相手にしてもらえない。

姉夫婦がアメリカ勤務になり、隆夫がマンションの留守番役として住んでいると、ある夜ひとりの美女が訪ねてきた。彼女・亮子（浅丘ルリ子）は夫とうまくいかず、友人である隆夫の姉を頼りに九州の婚家から東京へと飛び出してきたのだった。心労から発熱して着くなり卒倒した彼女の面倒を見るうち、彼はすっかりこの年上の女性に惹かれていく。若者らしく強引に接近し、ついには共に一夜を過ごすのだった。

ところが夫が事故に遭ったとの報せを受けると、亮子は九州に戻ってしまう。隆夫は気が気でない。なりふり構わず後を追っていく。しかし彼女は、既に夫とやり直す決心をしていた。それでもしつこく食い下がるが、軽くあしらわれてしまう。未知を子ども扱いしていた隆夫が、今度は大人たちから子ども扱いされる番だ。

徹底的に打ちのめされたものの、最後のプライドで、ほとんど無一文のくせに亮子の差し出す帰りの旅費を拒み飲まず食わずのまま鈍行列車を乗り継いで帰る。その辛い旅の過程で、彼は挫折から立ち直っていった。東京に着きやっとの思いで友人の部屋に転がり込み「腹減って死にそうだあ！」と叫ぶときには、もうすっかり吹っ切れている。

そんな隆夫を、未知は温かく迎える。稽古していた人形劇「青い鳥」の科白に託してじっと待ち続けていた気持を伝える。隆夫も、自分にいちばんふさわしいのは未知だと改めて気付くのだった。

この年の春、わたしは大学を卒業し文部省（当時）に就職していた。それと同時に「キネマ旬報」の白井佳夫編集長から映画評論家として文章を書かないかとの打診を受け、6月上旬号「日本映画批評」欄に『潮騒』評を書いて評論家デビューする。その次の号に書いたのが、この『思い出のかたすみに』だった。



【三十代、四十代、いわゆる〈中年〉世代による若者への批判が、近頃目につく。今どきの若いもんは——式の感情的なものではなく、いわく“幼児的な甘え”またいわく“創造力の欠如”。若い世代の一員としては残念なことだが、それらは、みごとに正鵠を射ているようだ。

宮崎晃監督も、そうした眼を若者に向ける〈中年〉のひとりなのかもしれない。浅丘ルリ子や北村和夫といった年配者の落ち着きと、若い主人公たちの危なかつしさの対照が、くっきりと表されている。中村雅俊にしろ檀ふみにしろ、人形劇のチルチルとミチルのように幼く、頼りなげだ。

宮崎晃監督のデビュー作「泣いてたまるか」(71)では、坂上二郎のサエない中年男と若者たちが対比されていた。四年後の二作、こんどはそれを裏返しに、大人の成熟ぶりを強調することで、若さが華やかさと背中合わせのものとして持っている軽佻で薄っぺらな面を浮き彫りにしている。

ただ、「想い出のかたすみ」の作者たちは、その欠点を見据えながらも、若者に対する期待を捨てていない。浅丘ルリ子から別れを告げられた後、金を貰うのを断って、新幹線を横目で見つつ鈍行列車で帰京する場面に、それは感じられる。北九州や山陽路の実景ロケが、この旅の厳しさを観る側に伝えて効果的だ。

苦しい旅を経て、甘えはふっきれ。朦朧となって友人の下宿に辿りつき、“腹減って死にそうだ”と陽気に叫ぶたくましさ。悲愴感とはおさらば、なのだ。その上で檀ふみと寄り添う結末は、ストップ・モーションになり、新しい青春の出発を示す。またひとつの物語が始まるのだ。

中村雅俊に、水谷豊ほどのみずみずしさが感じられない憾みはあるが、毒にも薬にもならない映画にはしたくない、といわんばかりの作者たちの苦心は、十分に実っている。】(キネマ旬報 75年六月下旬号)

新米役人として上司や先輩から指導を受けながら仕事を覚えている最中だったわたしにとって、隆夫と未知の若く未熟な危なかつしさは他人事とは見えなかった。〈中年〉世代からの自分たち世代への批判に反発するのではなく素直に受け止めているのは、役所の仕事で、その年代の人たちの足許にも及ばない自分の未熟さを痛感していたからだろう。若者批判が現今の「ゆとり世代」バッシングのような根拠のないイジメ的なものでなかったところに、当時の大人たちの度量の大きさと自信が感じられる。

43歳だった白井編集長は、「読者の映画評」投稿少年だったわたしを根気強く育ててくれた。また、投稿の映画評を読んでもくれたり、白井編集長が企画した監督と映画ファンの議論の会などで知り合ったりして飲み連れて行ってくれた小谷承靖、藤田敏八、西村潔といった四十代の監督たちも、若い映画ファンに優しくした。大人が若者を育てようという気持は、今と比べて明らかに強かったのである。